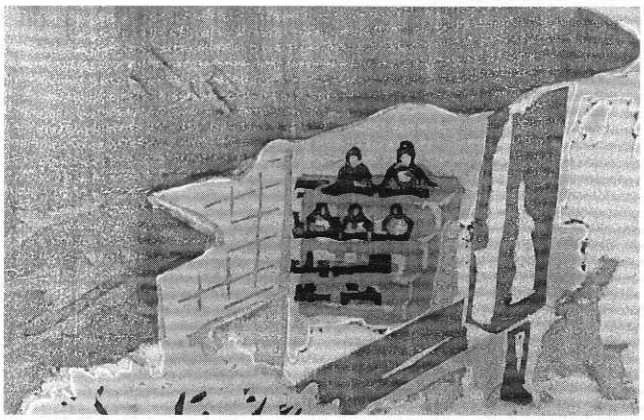
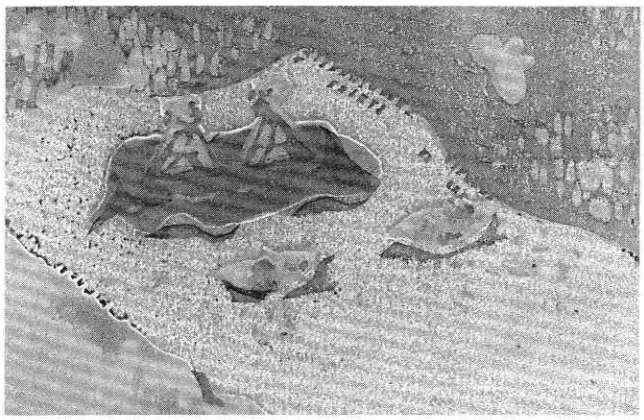
三島市　（通巻第63号）

郷土資料館だより

Vol. 21. No.2
1999. 3. 25





菜の花雛の話

春は桃の節句の季節。旧暦の名残で月遅れの節句を４月に祝うところもあります。三四呂人形の作者野口三四郎も、娘の桃里に、手作りの版画でお話を作りました。

これは江戸の昔の話です
或る淋しい山里に姉を里子妹を桃子
といふ二人の姉妹がありました
この二人のお家はたいそう貧しかった
のです
やがてこの村にも亦春がめぐって来
て野も畠も山もきれいな色に変
って鳥も蟻こもみんなたのしさう
にうたひ舞ふのでした
やがてたのしい桃の節句とな
りました。村の家々ではきれいな
おひな様を飾りました
一年に一度のお祭りなのです女
の子達は色々とひな遊びに耽け
るのでした
が二人のお家は貧しかったので
雛を飾る事が出来ません
はじめのうちは淋しく思ひましたが
姉の里子さんはフト面白い事を考へ出しました
そして二人は手をとって裏畑に出ました
そこには真黄色に咲いた菜の花畠がありました
妹の桃子は花や葉を摘んで運べば
姉さんの里子さんは一生懸命に作ります
お雛様をつくるのでした
おひな様は出来ましたそれは菜の花を頭に
葉を胴に松のはを刀にさしたおひな様でした
二人はこれを蓆の上に飾って葉のお皿に色々の花びらの
おごちそうを盛ってこのおひな様に捧げるのでした
かうして次の日も次の日も姉妹仲よく遊びました
蟻二等も全く楽しさうでした
かうして二人の姉妹に作られたおひな様は
この二人気持ちは云ふに及ばず形も全く美しいと云ふので
今もなほ「菜の花びな」として残ってゐます
おそらく後々までも傳はる事でせう。(了)

昭和十年新春　　三四呂作

企画展「にしきだ村」

― 錦田を守る神仏とおばあさんたち ―

期間　平成11年３月21日(日)～５月16日(日)
会場　三島市郷土資料館１階企画展示室

前号でお知らせしました当館企画展「にしきだ村」が、開催の運びとなりました。その土地やそこに根付く人々の暮らしについては、一人ひとりに語り尽くせない深い想いがあります。その想いを展示として表現することは非常に難しいのですが、ご覧いただき過去を振り返るとともに、未来を語りあえればと思います。

錦田村の成り立ち

錦田村は、現在の錦田地区、三島市域の東部を占め、大場川から箱根西麓一帯の地域です。昭和16年（1941）４月１日に三島町と合併し三島市となりました。当時の人口は約5,000人でした。

この錦田村は明治22年（1989）に川原ヶ谷、谷田、中村、竹倉、玉沢及び坂五ヶ新田、（塚原、市山、三ッ谷、笹原、山中）が集まり成立したものです。川原ヶ谷及び五ヶ新田を「錦ノ郷」といい、谷田村ほか四ヶ村を「谷田郷」といったので両郷の文字を組み合わせ「錦田村」と名付けられたものです。

大場川に合流する山田川・夏梅木川流域は豊かな水田が広がり、箱根西麓の丘陵部は開墾が進み、根菜類を主とした畑作地帯です。

農業を中心とした地域ですが、東海道沿いの坂地区は江戸時代から明治まで街道往来の稼ぎも重要な収入でした。しかし尾根上にあるこれらの集落は長く生活用水の確保に苦労し、何ヶ所かの井戸や湧き水から竹樋で集落へ水を引いたものでした。

一方、大場川沿岸の集落は大雨のたびに、洪水となりその被害に長く苦しみました。

錦田役場（現在、谷田池田病院の地）を中心に52年間、錦田村民は村の安泰と生活向上のために力を合わせました。

錦田の山のくらし

江戸時代初期、箱根五ヶ新田が開かれた時、最も苦労したのは水の確保でした。各集落とも尾根上にあるため、遠くの水源地から竹樋で水を引いたものです。現在は塩ビパイプとなり、何ヶ所かの水源地から水を引き、生活用水に困ることはほとんどなくなりました。

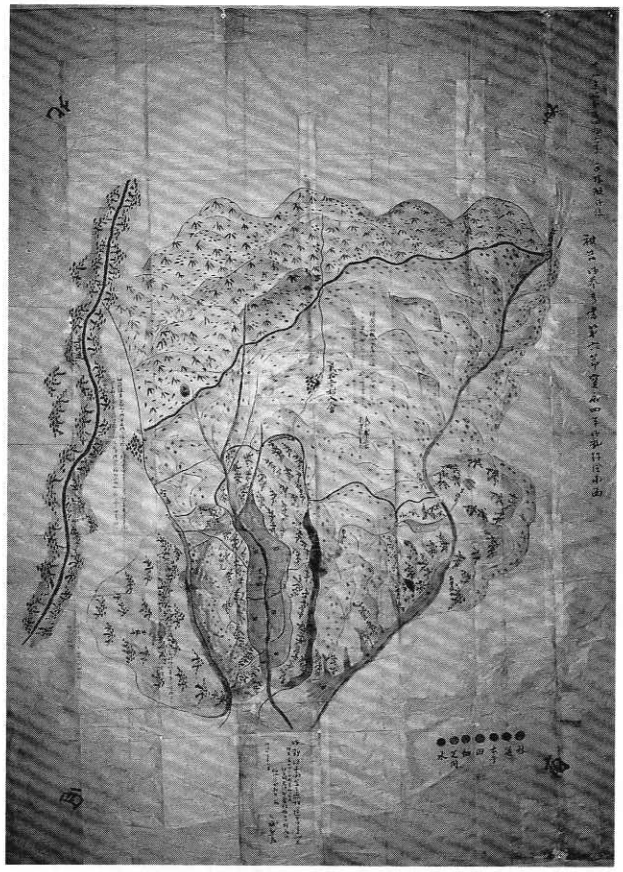
しかし、洗濯・風呂の水となると不足しがちで、特に市山は昭和30年代まで水の確保に

〈初音ヶ原での農作業風景　昭和16年〉

苦労しています。風呂の水くみは女性と子供の仕事、300ｍほどの山道を７回も汲みに行ったものでした。

山の集落では水の大切さ、有難さと先人の苦労を忘れずに、毎年１月下旬、「水神講」「不動講」を催しています。水の神に感謝するもので、この時、水源地・用水を見回り整備をする所もあります。

山の生活は近年まで、山畑からの農産物収入に頼るものでした。箱根山麓から収穫される、大根・人参・ごぼう・さつまいもなどは「坂もの」と呼ばれ品質の良いことで知られています。昭和30年代まで、山畑が水不足になると各集落で雨乞いの行事を行いました。竹を芯にして麦カラで作った巨大な龍が練り歩いた後は、必ず雨が降ったと伝えられます。



〈箱根入会絵図　明治19年〉

錦田の里のくらし

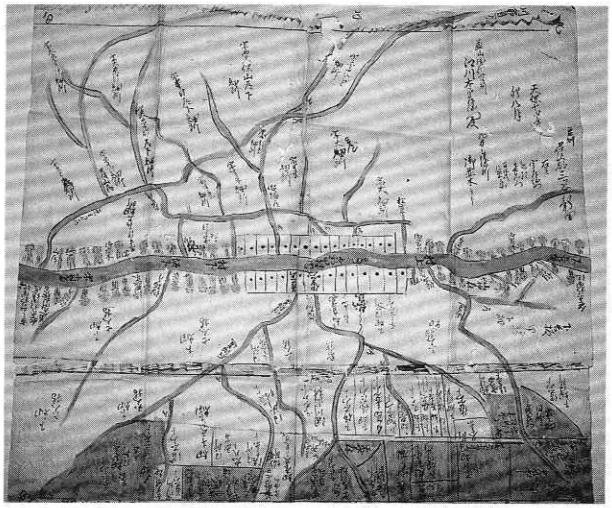
錦田の水は主に山田川と夏梅木川の流域、及び山田川から引かれた川原ヶ谷用水・谷田用水のかかる地域に広がります。これら用水がいつ引かれたのかはっきりしませんが、水量の少ない年は水の配分をめぐって川原ヶ谷と谷田・小山が争ったといわれます。

また、錦田村の西を流れる大場川は大雨の後増水し、各地で堤防を切り、田を冠水させるあばれ川でした。特に御門・中村付近は蛇行が激しく御門集落は大雨のたびに島のようになりました。

この大場川の河川改修は長く沿岸住民の悲願で、昭和７年（1932）より下流域から改修工事が始まりました。昭和17年（1942）には御門と中の住民が土地を提供して、２ヶ所の曲部をショートカット（直線流路にする）しました。戦争中の中断をはさみ、昭和25年（1950）に完成します。

畑作は、谷田山・竹倉山・山田山などの丘陵部を開墾して行われました。また、大正時代より極東練乳・森永乳業などの操業が本格化すると、牛乳（生乳）の需要が高まり、錦田の農家は、乳牛を飼い、その乳を毎日しぼって工場へ売るようになります。

昭和初期より、中の農家の女性達はリヤカーに収穫した野菜をのせ、三島の商店街に売りに行くようになります。戦後三島の街の人にとってなくてはならない野菜でした。



〈三ツ谷絵図　天保14年〉

錦田の祭りと信仰

錦田地域は、集落の氏神の祭り、毎月の講、各組ごとの講、女性だけの講などが続けられています。

錦田の大きな祭は、玉沢の祭でした。４月15～17日の３日間、満開となった桜の花見を兼ねて、三島・田方からも大勢の人々が集まりました。

〈滝川神社　「不動さん」〉

数年前に終了した「大題目」「大念仏」はそれぞれの宗旨のおばあさん達が、毎週日曜日毎に当番の集落へ出かけ、題目・念仏・経をあげるものでした。

各集落では年１～２回の氏神の祭りの他、モヨリ・組ごとに月次・十二夜講・十三仏などの講が毎月催されている所もあります。

また集落にあるお堂では、主におばあさん達が中心となり講が催されています。

「ガキバア講」（川原ヶ谷　林光庵）、「帝釈さん」（御門　帝釈堂）、「お観音さん」（塚原普門庵）、「淡島さん」（谷田　淡島神社）、「お地蔵さん」（中　手無地蔵堂、市山　地蔵堂）などで、ご詠歌・お題目・お念仏・お経などがあげられます。

〈中　天泊神社　幟台彫刻〉

この他「不動講」（１月）、「山の神講」（９月・10月、１月17日）、「水神講」（１月）、「初午」（２月）、「龍爪講」（３月１７日）、「百万遍」（３月15日）、「ホーカイ（法界）さん」、「風まつり」などの伝統的な行事が残っています。

１月14日（15日）のドンドン焼は子供会主催で賑やかに催されますが、多くの信仰行事は生活習慣が変わる中、ひっそりと続けられています。

錦田の教育

錦田地域は山間に散在する集落が多く、通学に不便だったので、近年まで支校・分校がありましたが、現在は錦田小・坂小に統合されました。

〈錦田小学校　昭和13年〉

錦田の近代教育は明治６年（1873）勤有学校（本校は社家村－大宮町２丁目）の３つの支校が三ッ谷（三谷学舎）、塚原（函山学舎）、谷田（日新学舎）に設立されことに始まります。同12年（1879）には「公立谷田学校」として独立しました。学区は後の錦田村村域と重なります。

この独立に奔走したのが渡辺輝寿（1831～1898）でした。輝寿は谷田に400年続く修験道法印家を継いでいましたが、明治の廃仏毀

釈により修験道から離れ、教育者の道を歩みました。勤有学校・谷田学校の訓導（今の校長にあたる）として、初等教育に力を入れる一方、『伊豆地理往来』を始め多くの教科書を編さんしました。

この後、三谷学校が独立し（後の坂小学校）、高等科が併設され、尋常小学校から国民学校、戦後は小学校と変遷します。

この間に、山田・塚原・小沢・山中の各分教場は順次本校に統合されました。

小学校を卒業した後も、働きながら農業補習学校・青年訓練所・青年学校で学ぶ者も多く、教練・学科・職業の他、女子には家事・裁縫の指導が行われていました。

錦田の変化

昭和16年（1941）４月１日、錦田村は三島町と合併し三島市となりました。

純農村であった錦田地域に軍需産業「中島飛行機三島製作所」が建設されたのは翌17年、軍用機の動力銃架の生産が始まり、多くの労働者が錦田に集まりました。戦後、この中島飛行機工場跡に国立遺伝学研究所が移転します。

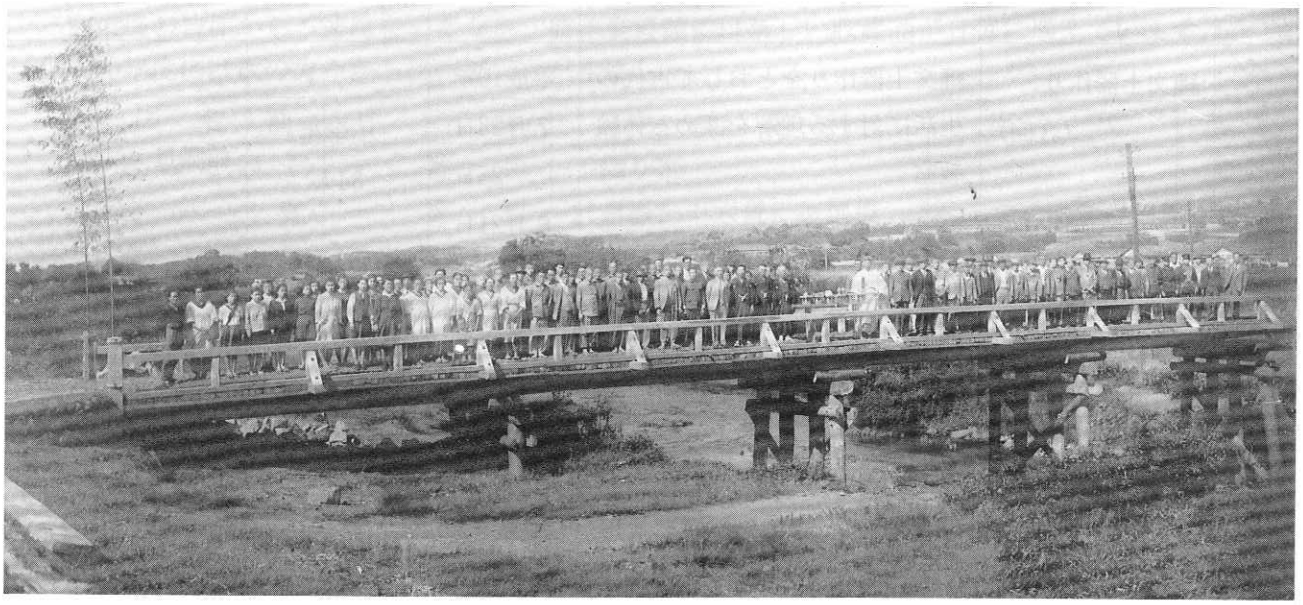
また大正12年（1923）に自動車道として整備された箱根西坂国道１号線は車の往来が激しくなりました。

昭和37年（1962）に三島バイパスが完成、昭和52年（1977）に塚原バイパス、昭和62年（1987）三ッ谷バイパスが完成。東海道沿いの集落に静けさが戻りつつあります。

道路網の整備とともに、昭和40年代より錦田の宅地化が進みます。谷田城が城の内住宅となり、桜ヶ丘、つつじヶ岡、小山台、緑ヶ丘、初音台、三恵台など次々と住宅団地が開発されました。人口も合併当時の約5,000人に比べ、平成８年（1996）現在21,891人と約４倍に伸びました。

山間の畑は土地改良事業が進み、元山中・山田山が完成しました。急傾斜の山畑だったのが雛壇状に整備され農作業の効率が上り、農業後継者達はハウス栽培など新しい農業に挑戦しています。

歴史・文化に特徴ある施設を持つ錦田地域は、すぐれた自然環境と伝統を守る住民により、バランスのとれた発展が期待される地域です。



〈中村橋　渡り初め　昭和23年〉

平成10年度　三島市郷土館事業報告

郷土資料館では、常設展示以外に企画展を開催し、市民各層を対象とした講座を開催しました。主要なものは次のとおりです。

区分	事業名	内容	実施日	入館者又は参加者	講師・備考
常設展示	ふるさとの自然と民俗（２階）	三島暦、三四呂人形、農具、下駄作り道具、商家の復元家屋など	年間		
	三島の歴史（３階）	旧石器時代から江戸時代までの三島の歴史を展示			
企画展示	「きたうえ村（北上村）」	昭和20年に三島町と合併した北上村（北上地区）の歴史と民俗・文化財とその変貌をたどる	平成10年３月21日～５月10日	15,699人	図録作成
	「ふりかえる20世紀三島100年の証言」	20世紀に三島が歩んだ100年間を写真と資料でふりかえる	７月19日～８月30日	13,404人	図録作成
	「海・サト・山・マチの民間信仰」	三島・沼津・富士の各市博物館で、それぞれの地域に伝わる民民間信仰を調査・紹介をする	10月３日～11月15日	18,708人	３市共同開催 パンフレット作成
	「にしきだ村（錦田村）」	昭和16年に三島町と合併した錦田村（錦田地区）の歴史と民俗・文化財とその変貌をたどる	平成11年３月21日～５月16日		図録作成
教育普及	縄文土器作り（３回）	縄文土器作りをとおして古代の生活に対する理解を深める体験教室	平成10年７月23日 25日 ８月21日	小学生34人	館職員
	夏の郷土学習（野外学習）	「水辺の歴史訪問」	８月12日	小学生10人	秋津　亘氏
	郷土教室（体験教室）	竹細工作り	７月11日	小学生11人	瀬川　到氏
		古代の生活を体験	11月14日	小学生10人	池谷初恵氏

区分	事業名	内容	実施日	入館者又は参加者	講師・備考
教育普及活動	ふるさと講座（連続講座）	「三島市の文化財めぐり」 三島の巨木・名木を訪れて 砦跡・古寺社・古墳を訪れて 三嶋大社を中心に 三島の名刹めぐり	平成10年 10月７日 10月22日 10月29日 11月４日	市民 36人	高島　勝氏 小林弘邦氏 館職員 迫田信行氏
	郷土資料館講座「静岡県東部の民間信仰」	企画展「海・サト・山・マチの民間信仰」関連講演会、道祖神をめぐる諸問題を中心に	11月11日	市民 65人 生涯学習センター	木村　博氏
出版活動	「郷土館だより」の発行	郷土館広報及び調査報告など	年３回	各1,500部	無料配布
	企画展関連出版	「ふりかえる20世紀・三島100年の証言」図録		発行 1,000部	１部　500円
		「海・サト・山・マチの民間信仰」パンフレット		発行 2,000部	無料配布
		「にしきだ村」図録		発行　500部	１部　800円
	古文書研究	「道中之日記」		発行　300部	１部　800円

その他の主要事業

３階収蔵庫移動棚導入　（工期　平成10年11月11日～11年１月20日）
「樋口文庫」ほか資料修復　17点
「三四呂人形」修復　（平成６年度より継続事業　10年度完了　18作品）
「ふるさと人物」説明板　（吉原守拙・呼我、花島兵右衛門・轍吉）

新収蔵品紹介

三島市民の皆様からご連絡をいただき、郷土資料館には新しい収蔵品が日毎に増えています。
平成10年度には次の方々から御寄贈いただきました。

お名前	住所	主な資料	年代	点数
岩塚たみ子	一番町	手織り帯		２点
緒明　實	一番町	「富嶽三十六景」復刻板		１冊
大洲秋登	谷田東富士見	和傘		２点
[redacted]				[redacted]
斉藤静雄	新谷	南都暦等		42点
鈴木辰巳	夏梅木	中島飛行機社員名札等	昭和18年頃	４点
高田　修	文教町	シルクハット		３点
		宝塚歌劇団入場券等	昭和10年代	１括
高橋久子	緑町	高橋省吾氏所蔵資料		１括
日吉昌子	夏梅木	三島宿関係資料	明治10年代	１括

ご協力ありがとうございました。(五十音順　敬称略)

近刊情報

『にしきだ村(錦田村)』

三島市は昭和に入り、三島町・北上村・錦田村・中郷村がつぎつぎと合併し、現在の市域となっています。

錦田村は、三島町と大場川を挟んで東側（中を除く）に位置し、箱根西麓の山林・山畑と大場川に流れ込む山田川・夏梅木川に開けた小扇状地の水田地帯からなる農村でした。

ここには戦国時代の山城、山中城が築かれ、江戸時代には箱根峠に至る東海道沿いの五ヶ新田が成立します。谷あいの玉沢には、幕府の厚い庇護を受け10万石の格式を誇った妙法華寺（日蓮宗）があります。第二次大戦後になると国立遺伝学研究所が新設され、研究成果を世界へ発信しています。

こうした歴史とロマンを秘めた地域ですが、国道１号線をはじめ道路が整備されると、住宅団地も造成され、景観が変わりつつあります。

しかし路傍の石造物や祭りなどの年中行事は長い農村の伝統を伝えています。

今回の企画展では昭和16年４月に三島町と合併し三島市となるまでの錦田村を中心に錦田地域の歴史・民俗・文化を取り上げ紹介致します。

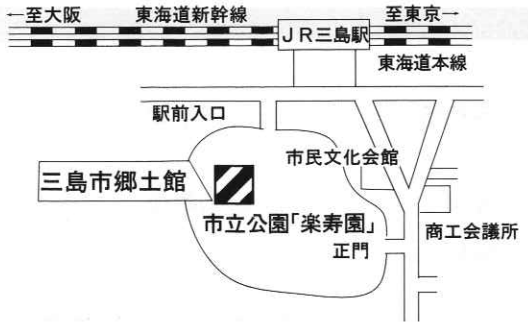
『道中之日記』

当館所蔵の「勝俣文庫」の一冊で、文庫の元所有者である勝俣花岳という人物が、伊勢参詣を中心とした西国旅行で著した『道中之日記』を郷土資料館古文書会により翻刻しました。

花岳の旅は嘉永六年(1853)に行われました。旅立ちは正月七日、正月気分もまだ覚めやらぬ「七草」の日でした。花岳はこの旅の一員となって克明な旅日記を書き残しました。日記には毎日の日付と天候、休・泊した宿場と宿は必ず記し、それ以外に見学した史跡や感想などを書き込んでいます。俳句好きな花岳らしさは、行き先の所々で俳句を読んでいる点です。旅日記に一層の趣をそえています。日記帳の最後には旅で費やした費用一覧があり、当時の旅にかかる費用を知ることができる絶好の史料となっています。一行の旅は２月26日に三島宿へ無事に帰着しています。約二ヶ月にも及ぶ大旅行でした。この旅の内容については本書をお読みいただき、ぜひ、花岳と一緒に江戸時代の旅を楽しんで下さい。

利用案内

休館日　毎週月曜（祝日の時は翌日）
　　12月27日～１月２日
開館時間　午前９時～午後５時00分(10/31まで)
入場無料　（但し、楽寿園入場の際、有料）



三島駅（南口）から徒歩５分。市立公園楽寿園内

郷土資料館だより　No.63
平成11年（1999）３月25日発行
（年３回発行）
編　集　三島市郷土資料館
住　所　〒411-0036
三島市一番町19-3　楽寿園内
TEL　0559―71―8228
FAX　0559―81―3730
発　行　三島市教育委員会